

婦人雑誌にみる近代日本

～明治から昭和前期にかけて～

県立図書館の展示パネル (Web 版) をご紹介します。

— 県立図書館において、以下の期間、展示したものです —

展示期間

平成25年5月10日 (金) ～ 8月7日 (水)

※月曜日、毎月第2木曜日は休館 (祝日の場合は開館)

会場

県立図書館本館1F 展示コーナー

お問い合わせ 神奈川県立図書館 情報整備課

電話：045-263-5922 FAX：045-241-0985

目次

はじめに

第1章 明治～近代日本の夜明け～

第2章 大正～モダンガールの登場～

第3章 昭和前期～戦争そして新たな一歩～

明治・大正の女性運動家たち

年表

参考文献一覧



婦人雑誌にみる近代日本 ～明治から昭和前期にかけて～

はじめに

1868年、260年以上にも及んだ徳川幕府の終焉は、新しい時代の幕開けでもありました。明治を迎えて人々は夏目漱石が「西洋で百年かゝつて漸く今日に發展した開化を日本人が十年に年期をつづめて、しかも空虚の譏を免かれるやうに、誰が見ても内發的であると認める様な推移をやらうとすれば是亦由々しき結果に陥るのであります」(『現代日本の開化』)と述べた急激な近代化の波にさらされます。

その波に乗り、日本初の一般的な雑誌である『西洋雑誌』(1867年10月創刊)に遅れること18年、最初の本格的な婦人雑誌『女學雑誌』が1885年7月20日に創刊されました。

以降、婦人雑誌は一般雑誌とは異なる独自の路線で發展していきます。この展示では、明治、大正、そして昭和前期にかけて劇的に變化していった日本を、婦人雑誌を軸に様々な資料を通してみていきます。



『女學雑誌』(萬春堂)
複製版 1号 [1885年
7月] 表紙

第1章

明治 ～近代日本の夜明け～

■文明開化、近代国家確立へ

幕府によるそれまでの鎖国政策から一転して、さまざまな西洋文明が一気に入ってきた明治時代。西欧列強の植民地にはなるまいと、懸命な近代化が押し進められました。国会開設、憲法制定、教育制度の確立。

近代国家としての体制が国内では急ピッチで整えられ、外からの圧力に対しては1894年の日清戦争、1904年の日露戦争と日本も帝国主義へ突き進んでいきます。

人々は必然的に価値観の転換を迫られ、暮らしや家庭のあり方も変わっていきます。当時創刊された雑誌からは、その様子を読み取ることができます。

■雑誌創刊ラッシュ

★ 要因1 印刷機械導入による大量生産へ

西洋からの印刷機械が輸入されたことにより、日本の出版は機械による大量生産へと移行していきます。率先して西洋文化を取り入れた明治政府は、1871年に現在の東京大学の前身の一つである大学東校の構内に文部省直属の活版所を設けました。

	高等女学校数	生徒数
1900年	52校	11,984人
1905年	100校	31,918人
1910年	193校	56,239人

[高等女学校の増加] (『学制百年史』
文部省編より作成)

★★ 要因2 教育の普及、新しい読者層の登場

1886年、初代文部大臣森有礼によって学校令が公布され、日本における近代学校制度の基盤が整えられました。そして、遅れていた女子の中等教育についても、1899年に高等女学校令が公布され、修業4年の高等女学校が設置されることで徐々に充実していきます。

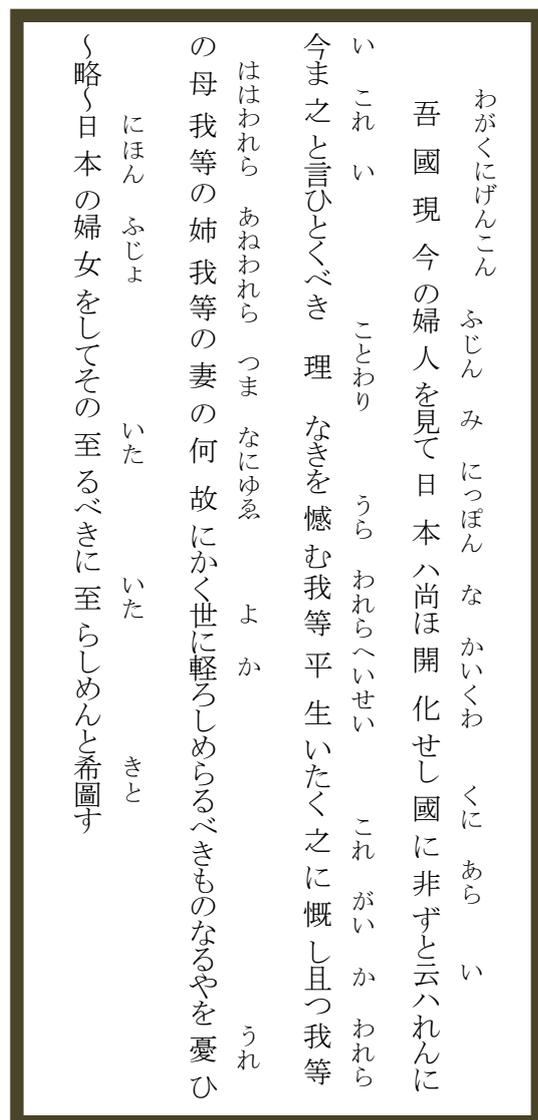
教育の普及による識字率の上昇はすなわち、新たな読者層を生み出すことを意味しました。

■新聞に掲載される婦人向けの広告や記事

大手新聞に家庭面が登場したのもこの頃です。新聞を読む女性が増え、『大阪毎日新聞』は1898年3月6日から「家庭の栞」欄を設けて、家庭生活の日々に役立つ実用記事を載せるようになりました。このことは、男性だけでなく女性も新聞の読者として明確に意識され始めたのを表しています。

■教育・啓蒙誌としての婦人雑誌の誕生

大量生産が可能になり読者層も広がった結果、明治初期に創刊された雑誌は数百種ともいわれています。一般雑誌はもちろん、女性に良妻賢母思想を広めるための婦人雑誌も多く創刊されました。



『女學雜誌』(萬春堂)

複製版 1号 [1885年7月]

発行の主旨の一部

■女学生向けの本格的な雑誌創刊

日本初の婦人雑誌『女學新誌』の編集長を務めた近藤賢三が雑誌の持ち主と喧嘩別れをし、1885年7月、新たに本格的な雑誌をと意気込み創刊したのが『女學雜誌』です。その意図はあるべき女性の姿、つまり女学思想を世に広めることであり、活字ばかりのかなり堅苦しい、教育・啓蒙の性格が色濃いものでした。

1889年頃に全盛期を迎えた『女學雜誌』は、1904年2月526号を最後に幕を下ろしますが、後に大きな影響を与えます。

■新たな芽吹き、婦人向けジャンルの確立

1894年に勃発した日清戦争による大戦景気を経て、日本の経済は大きく発展します。雑誌もその影響を受け飛躍的に発行部数を増やし、新聞と並ぶ新しいマスメディアとしての地位を確立しました。

女子教育の普及によって現役の女学生達はもちろんのこと、若い女性読者層が拡大され、明治30年代には、これまで女学生を対象としていた雑誌に加え成人女性を対象にした雑誌があいついで創刊されています。その数は150以上とも言われ、婦人向けジャンルが確立されました。

■『國民之友』と『家庭雑誌』

当時のオピニオンリーダー、徳富蘇峰が設立した民友社が1887年2月に創刊したのが、日本初の総合雑誌『國民之友』です。通常1千部前後のところ異例の1万部を超える発行部数を誇ったこの雑誌は、新しい時代に期待を抱く若者達に「平民主義」という蘇峰の思想を説いています。

では同じく蘇峰が女性向けに1892年9月に創刊した『家庭雑誌』はどうでしょうか。『國民之友』に掲載された『家庭雑誌』の広告には「社會を改革せんと欲せば必ず先ず家庭を改革せざるべからず。吾人が家庭雑誌を發行せんとする豈偶然ならんや」とあります。日本を近代化させるために、知識階級の男性によって女性を近代国家にふさわしい在り方へと導く、それが良妻賢母思想であったのです。

■女性たちの進出

明治の終わりには良妻賢母思想の枠から飛び出した雑誌も創刊されました。

『世界婦人』

1907年1月創刊

女性運動家で平民社の社会主義運動にも参加した福田英子が、その平民社の石川三四郎らの助けを借りて創刊しました。

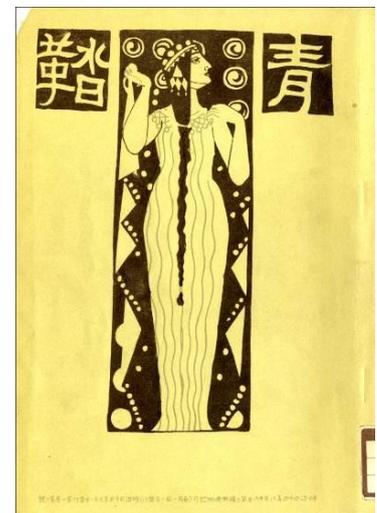
福田は生活苦と戦いながら、女性解放を主張し刊行を続けます。しかし1909年7月に出した38号が当局の取締りにあい、そのまま廃刊となってしまいました。

『青鞞』

1911年9月創刊

元始、女性は太陽であつた—平塚らいてうたちによって創刊され、女性の覚醒をうたった『青鞞』は、初めて女性自身の手で編集・出版された婦人雑誌です。1899年に行われた新聞紙条例の改正により、男性だけでなく女性も雑誌の発行ができるようになったことも、彼女たちの背中を後押ししました。

しかし、1913年2月には2回目の発行禁止処分を受けるなど、その道りは平坦ではありませんでした。



『青鞞』(青鞞社)複製版
11号[1911年9月]
表紙